

# 小学生版学校適応感尺度の作成

## The Development of the Scale of School Adjustment for Elementary School Children

山口豊一・下村麻衣・高橋美久

奥田奈津子・松寄くみ子

Toyokazu YAMAGUCHI, Mai SHIMOMURA, Miku TAKAHASHI

Natsuko OKUDA, Kumiko MATSUZAKI

### 要 旨

本研究の目的は、小学生の学校適応感を測定するための尺度を作成し信頼性と妥当性を検討することであった。小学生の児童 608 名を対象に質問紙調査を実施し、有効回答者 525 名を対象に、因子分析による尺度の検討を行った。その結果、第 I 因子「心理・社会」5 項目、第 II 因子「学習・進路」4 項目、第 III 因子「先生との関係」2 項目、第 IV 因子「心身健康」2 項目の 4 因子から構成されていることがわかった。よって以上 4 因子 13 項目を以て小学生版学校適応感尺度とした。

小学生版学校適応感尺度の信頼性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、各下位尺度の  $\alpha$  係数は、「心理・社会」.76、「学習・進路」.70、「先生との関係」.84、「心身健康」.65 であった。以上より、一定の内的一貫性が示された。次に、妥当性を検討するため、小学生版学校適応感尺度と Q-U におけるピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、小学生版学校適応感尺度下位尺度得点と Q-U 下位尺度得点の間に、 $r = .20 \sim .71$  ( $p < .001$ ) の有意な相関関係がみられた。以上より各下位尺度の基準関連妥当性が示された。

キーワード：小学生、学校適応感、Q-U

## I. 問題・目的

近年、学校現場における不登校・いじめなどの問題は年々増加傾向にあり、社会的にも大きな問題として取り上げられている。平成 26 年度の小学校の不登校児童数は 25,866 名で、その割合は全小学

生の0.39%となっており、255人に1人が不登校児童であることが示されている(文部科学省,2015)。また、不登校やいじめなどの問題が深刻化する中で、その予防的対応に関するニーズは非常に高くなっている。これらの学校不適応の問題の背景には、家庭、個人、学校、友人関係など様々な要因が想定され、多くの研究が進められている。

さらに、これらの問題行動に対して生徒が学校環境において適応感を持つか否かが、予防の上で重要とされている(大重・渡辺,2008)。

しかし、学校適応感に関する研究の対象は、中・高等学校の生徒が多く、小学校の児童を対象とした研究は多くない。また、学校適応感尺度については、中・高等学校用は作成されている(池田ら,2012)が、小学生版は作成されていない。また、小学生版学校適応感尺度の作成にあたり、中・高等学校と異なる点として、小学生の学校適応感には教師との関わりが関連していることなどが考えられる(中井・庄司,2008 ; 河野,1988)。

よって、小学生用の学校適応感尺度の作成は、小学生の学校適応感を測定し、予防的対応をするためにも必要であり、その作成は喫緊の課題であるといえる。そこで、小学生版学校適応感尺度の作成を本研究の目的とする。

## II. 方法

### (1) 調査協力者

関東地方の公立小学校5校に在籍する小学4～6年生の608名に調査を実施した。

### (2) 調査時期

2015年6月～7月

### (3) 調査手続き

研究協力に同意を得た関東地方の小学校5校にて質問紙調査を実施した。調査の概要を管理職に説明し、同意の得られた小学校に調査用紙を郵送し、実施後返送してもらった。

### (4) 質問項目

#### ①フェイスシート

学年、性別を尋ねた。

#### ②小学生の学校適応感に関する質問紙

山口・水野・石隈(2004)の中学生の悩みと深刻度尺度を参考に、臨床心理学を専攻する大学院

生3名、指導教員1名により検討をし、作成した20項目を採用した。「まったくあてはまらない」～「とてもよくあてはまる」の4件法を用いて回答を求めた。参考にした中学生の悩みと深刻度尺度20項目を以下に示す(表1)。

表1 中学生の悩みと深刻度尺度(山口ら, 2004)

1	先生に対して不満があるとき
2	教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき
3	自分の性格や体格で気になることがあるとき
4	部活動がうまくいかないとき
5	異性との交際のことで悩みがあるとき
6	友だちとのつき合いが上手くいかなかったり、友だちがいないとき
7	自分の家庭のことで心配や悩みがあるとき
8	自分に合った勉強方法がわからないとき
9	授業の内容がわからないとき
10	何となく意欲がわかず、勉強する気になれないとき
11	勉強しても成績が伸びないとき
12	成績や勉強のことで親の期待が重荷のとき
13	将来の自分の進路について心配があるとき
14	進路や就職のことに真剣に取り組めないとき
15	進路選択において、自分の希望が親や先生の意見と一致しないとき
16	自分の適性がわからないとき
17	学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりしたとき
18	学校あるいは学級になじめないとき
19	一日中、眠かったり、身体がだるくなったりしたとき
20	頭痛・腹痛などが起こるとき

③楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U 小学校4～6年生用(河村,1998)

学級集団をアセスメントし、より適切な支援をするための尺度。「学校生活意欲尺度」9項目と「学級満足度尺度」12項目から構成される、全21項目、4件法。小学生版学校適応感尺度との基準関連妥当性を検証するために用いる尺度である。なお、これは小学生版学校適応感尺度との間に正の相関が想定される。

#### (5) 倫理的配慮

質問用紙の冒頭では、回答は任意であること、研究以外の目的には使用しないこと、個人が特定されないこと等が説明されている。また、調査用紙への回答をもって調査協力への同意とみなした。

### Ⅲ. 結果

#### (1) 調査対象者

質問紙を配布し、608 名より回答が得られた。回収された質問紙のうち、空欄や不備のなかった 525 名のデータを分析対象とした（有効回答率 86.35%）。

#### (2) 小学生の学校適応感に関する質問紙の因子分析

小学生の学校適応感に関する質問紙の 20 項目に対し因子分析を行った。質問紙の 20 項目を以下に示す（表 2）。

まず、記述統計を算出し天井効果・フロア効果の検討を行った。その結果、9 項目について天井効果が見られた。そのため臨床心理学を専攻に学ぶ大学院生 2 名と指導教員 1 名で質問項目の検討を行った。その結果、分析において必要な項目であると判断し、全項目を含む 20 項目を分析対象とした。

次に、全 20 項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット因子解釈可能性から 4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 4 因子を仮定して因子分析を行った。その結果、因子負荷量が .40 未満であった、「3. 自分の性格や体格が気になる」「7. 家族のことで心配や悩みはない」「10. なんとなくやる気がおきず、勉強する気になれない」「11. 勉強しても、成績があがらない」「12. 成績や勉強のことで、親に注意される」「15. 自分のやりたいことを、親や先生が応援してくれる」「16. 自分の得意なことや、苦手なことがわかる」の 7 項目を分析から除外し、再度因子分析を行った結果、最終的に 13 項目となった（表 3）。

表2 小学生の学校適応感に関する質問紙の質問項目

1	先生にまんぞくしている
2	先生との関係や、先生の教えかたにまんぞくしている
3	自分の性格や体格が気になる
4	クラスでうまくいっている
5	男の子は女の子と、女の子は男の子と、なかよくできている
6	友だちとなかよくできている
7	家族のことで心配や悩みはない
8	自分にあった勉強方法がわかる
9	じゅぎょうの内容がわかる
10	なんとなくやる気がおきず、勉強する気になれない
11	勉強しても、成績があがらない
12	成績や勉強のことで、親に注意される
13	将来の夢がある
14	勉強やクラスの活動に、まじめに取り組むことができている
15	自分のやりたいことを、親や先生が応援してくれる
16	自分の得意なことや、苦手なことがわかる
17	学校に行くのが楽しい
18	学校やクラスになじんでいる
19	一日中、ねむかったり、体がだるくなったりする
20	よく頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする

第Ⅰ因子は「6. 友だちとなかよくできている」、「18. 学校やクラスになじんでいる」など、周囲の生徒とうまくいっている内容に関する5項目で構成されており「心理・社会」因子と命名した。

第Ⅱ因子は「9. じゅぎょうの内容がわかる」、「14. 勉強やクラスの活動に、まじめに取り組むことができている」など、学習や進路に関する4項目で構成されており「学習・進路」因子と命名された。

第Ⅲ因子は「1. 先生にまんぞくしている」、「2. 先生との関係や、教えかたにまんぞくしている」など、先生との関係に関する2項目で構成されており「先生との関係」因子と命名された。

第Ⅳ因子は「19. 一日中、ねむかったり、体がだるくなったりする」、「20. よく頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする」など、体調に関する2項目で構成されており「心身健康」因子と命名された。

各因子間の相関は、「心理・社会」と「学習・進路」において  $r=.66$ 、「心理・社会」と「先生との関係」において  $r=.54$ 、「学習・進路」と「先生との関係」において  $r=.61$  であり、比較的強い正の相

関がみられた(表3)。「心理・社会」と「心身健康」において  $r=.29$ 、「学習・進路」と「心身健康」において  $r=.28$  であり、弱い正の相関がみられた。「先生との関係」と「心身健康」において  $r=.18$  であり、ほとんど相関がみられなかった。

以上より、この 13 項目をもって「小学生版学校適応感尺度」とする。

表3 小学生版学校適応感尺度の因子分析 (Promax回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV
<b>&lt;心理・社会 (<math>\alpha = .76</math>)&gt;</b>				
6.友だちとなかよくできている	<b>.77</b>	-.05	-.09	.01
18.学校やクラスになじんでいる	<b>.66</b>	.05	.04	-.02
4.クラスでうまくいっている	<b>.65</b>	.03	-.02	.05
17.学校に行くのが楽しい	<b>.46</b>	.09	.19	-.04
5.男の子は女の子と、女の子は男の子と仲良くできている	<b>.46</b>	.04	.02	-.01
<b>&lt;学習・進路 (<math>\alpha = .70</math>)&gt;</b>				
9.じゅぎょうの内容がわかる	-.04	<b>.73</b>	.03	.07
14.勉強やクラスの活動に、まじめに取り組むことができている	.04	<b>.73</b>	-.04	-.06
8.自分に合った勉強方法がわかる	.03	<b>.59</b>	-.02	.07
13.将来の夢がある	.05	<b>.43</b>	.00	-.09
<b>&lt;先生との関係 (<math>\alpha = .84</math>)&gt;</b>				
1.先生にまんぞくしている	.02	-.08	<b>.88</b>	.02
2.先生との関係や、教えかたにまんぞくしている	-.03	.08	<b>.85</b>	-.01
<b>&lt;心身健康 (<math>\alpha = .65</math>)&gt;</b>				
19.一日中、ねむかったり、体がだるくなったりする	-.04	.04	.04	<b>.71</b>
20.よく頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする	.05	-.06	-.03	<b>.70</b>
	<b>因子間相関</b>			
	I	—	.66	.54
	II		—	.61
	III			—
	IV			

### (3) 信頼性の検討

内部一貫性による信頼性を検討すると、各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数は、第 I 因子「心理・社会」は 5 項目で  $\alpha=.76$ , 第 II 因子「学習・進路」は 4 項目で  $\alpha=.70$ , 第 III 因子「先生との関係」は 2 項目で  $\alpha=.84$ , 第 IV 因子「心身健康」は 2 項目で  $\alpha=.65$  であった。

したがって各因子に十分な内的一貫性が示された。

#### (4) 基準関連妥当性の検討

次に基準関連妥当性の検討のために、小学生版学校適応感尺度と Q-U との相関係数を算出した (表 4)。その結果、小学生版学校適応感尺度下位尺度得点と Q-U 下位尺度得点の間に、 $r=.20 \sim r=.71$  ( $p<.001$ ) の有意な正の相関関係がみられた。

したがって一定の基準関連妥当性があることが示された。

表4 学校適応感尺度とQ-Uの下位尺度間相関, 平均値, *SD* N=525

	心理・社会	学習・進路	先生との関係	心身健康
<i>M</i>	3.36	3.38	3.45	2.81
<i>SD</i>	.55	.54	.66	.90
やる気(Q-U)	.41**	.60**	.30**	.30**
居心地(Q-U)	.62**	.71**	.50**	.20**

\*\*  $p<.001$

## IV. 考察

### (1) 小学生版学校適応感尺度の作成に関して

本研究の目的は、小学生の学校適応感を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。本尺度を作成するにあたり、山口ら (2004) を参考に、内容を児童向けに改め小学生の学校適応感に関する項目を設定した。

その結果、小学生版学校適応感尺度から「心理・社会」「学習・進路」「先生との関係」「心身健康」の4因子が抽出された。また、十分な信頼性と妥当性が示されたことから小学生版学校適応感尺度を4因子とすることが適切であると確認された。これら4因子のうち、「心理・社会」「学習」「進路」「心身健康」は山口ら (2004) の先行研究と同様の因子が抽出された。なお、「学習」と「進路」の因子が本尺度では一つの因子に統合されたことから、小学生は中学生と比較して学習・進路の関連の強さが示唆された。

また、今回新たに「先生との関係」が抽出された。質問項目の内容から推察すると、学校適応感を高めるためには先生との関係が重要であることが示唆された。中井・庄司 (2008) は、教師の行動と児童の学校適応感の関連を指摘しており、河野 (1988) は、教師との関係が生徒の学校適応や人格形成にまで影響を及ぼすことを指摘している。よって、この結果は、従来の先行研究と一致するもので

あった。さらに、小学校は中学校とは異なり学級担任制であり、先生との関連がより重要なのであろう。本研究の結果により、小学生の学校適応感における先生との関係の重要性が確認されたといえる。

さらに、信頼性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、各下位尺度の  $\alpha$  係数は、「心理・社会」.76、「学習・進路」.70、「先生との関係」.84、「心身健康」.65 であった。以上より、一定の内的一貫性が示された。次に、妥当性を検討するため、小学生版学校適応感尺度と Q-U におけるピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、小学生版学校適応感尺度下位尺度得点と Q-U 下位尺度得点の間に、 $r=.20\sim.71(p<.001)$  の有意な正の相関関係がみられた。以上より尺度の基準関連妥当性が示された。

## (2) 今後の課題

本研究から、「小学生版学校適応感尺度」の信頼性、基準関連妥当性は確認された。しかし、因子分析の結果、「先生との関係」「心身健康」の 2 因子が 2 項目からの構成となった。そのため、再度小学生版学校適応感尺度を検討する必要がある。

また、本研究は尺度作成にとどまり、小学生の学校適応感を検討するまでに至らなかった。今後は、性差・学年差、さらにそれを促進したり阻害したりする要因についても検討することが課題となる。

なお、この研究は、平成 27 年度跡見学園特別研究助成費を受けた。

## 引用・参考文献

- 池田正博・日高美咲・松沼風子・小杉考司 (2012). 新学校適応感尺度 FIT 高校生版の開発, 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 198.
- 河村茂雄 (1998). たのしい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック (小学館編), 図書文化.
- 河野義章 (1988). 教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果, 教育心理学研究, 36, 161-165.
- 文部科学省 (2015). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001062614&cycode=0> 2015 年 11 月 18 日閲覧
- 中井大介・庄司一子 (2008). 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連, 発達心理学研究, 19, 57-68.
- 大重啓・渡辺弥生 (2008). 親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響, 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 333.
- 山口豊一・水野治久・石隈利紀 (2004). 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連—学校心理学の視点を生かした実践のために—, カウンセリング研究, 37, 241-249.